



第 117 号  
北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」  
2026.1.15



ポーランド名作映画ビデオ鑑賞 & 交流会 2026-1

愛に関する短いフィルム

クシシュトフ・ケシロフスキ監督  
1988 | ポーランド | カラー | 86 分  
1988 ポーランド映画祭 金獅子賞 主演女優賞  
サン・セバスチャン国際映画祭 審査員特別賞など



2026.3/14 (土)

13:30~ 入場無料

〈第 118 回例会〉どなたもご参加歓迎 定員 40 人

札幌エルプラザ 4F 中研修室 (北 8 西 3)

参加方法 (予約推奨) ☎080-4071-0956(安藤)

✉ hokkaidopolandca@gmail.com



クシシュトフ・ケシロフスキ監督 (1941-96) ウッチ国立映画大学で学び、70 年代に優れたドキュメンタリーを多数製作後、長編第一作『傷跡』(76) を発表し絶賛される。以後ポーランドの困難な社会情勢の中でも『アマチュア』(79)、『偶然』(81)、『終わりなし』(84) など秀作を発表、10 話の TV シリーズ『デカローグ』(87) は映画史に残る傑作となった。独特で詩的、神秘的な映像の『ふたりのペロニカ』(91) で多くのファンを獲得し、『トリコロール』3 部作 (93-94) は欧州の映画祭で多数受賞。次作に世界の期待が集まる中、心臓発作により 54 歳で世を去った。

本作は『デカローグ』の第 6 話「ある愛に関する物語」のロングバージョンであり、純愛が存在するかを問うた傑作である。

19 歳の郵便局員トメクは、ワルシャワの団地で友人の母と暮らしているが、孤児院で育ったため友達が少ない。トメクは隣の団地に住む年上の美しい女性マグダに強く惹かれ、望遠鏡で彼女を覗き見している。偽の通知を出して郵便局に来させたり、匿名で電話を掛けたり、牛乳配達を引き受けたりする。

牛乳を届けたトメクはマグダに愛しているからと告げてデートを頼み、彼女は応じる。デート中、トメクは彼女を 1 年間見ていたこと、彼女宛ての手紙を盗んだことを打ち明ける。マグダは驚き、「愛なんてないわ。幻想よ」と冷たく言い放つ。

マグダ「私は悪い女よ」→トメク(愛に苦しみ泣いていた姿を見ていたので)あなたはそんな人ではないという態度を示す→その夜マグダはトメクをアパートに誘い、彼の手を自分に導く(性行為に至らず)マグダは「これがいわゆる愛の正体よ」→トメクは深く傷つく→トメクを傷つけたことにマグダは

さらに深く傷つき、謝罪するが返事はない。

ロシアの文芸批評家 M.パフチンが、ドストエフスキー作品の特徴として「ポリフォニー(多声性)」と「カーニバル」、さらに「心に沁み透る言葉」と呼ぶ究極の殺し文句を挙げたことはよく知られているが、以上のストーリー進行は「ポリフォニー」や「心に沁み透る言葉」が表現されているとみることもできる。

そしてトメクは部屋で…。マグダはトメクが入院したと知らされ、後日トメクのもとを訪ねるが、友人の母は彼に近寄せようとしめない。部屋にあった望遠鏡を覗くと、マグダが見たのは…。

本作の特徴は、見られていたものが見る側に、愛されていたものが愛する側に代わるという恋愛の本質である「対話性」に迫った点にある。マグダ役 of グラジナ・シャポウォフスカのドストエフスキー的演技は高度で素晴らしく、1988 年グディニヤ・ポーランド映画祭の主演女優賞にふさわしいものである。

また、『デカローグ』のうち 8 作に登場する神の使いのような人物や、ズビグニエフ・プレイスネルの音楽にも注目してほしい。(池田光良、運営委員)

[お話: 坂尻昌平氏] 映画研究者、札幌大谷大学非常勤講師。共編著『ジャック・タチ』(1999 エクスクアイアマガジンジャパン), 『ジャック・タチの映画宇宙』(2003 同), 『世界映画大事典』(2008 日本図書センター), 『淡島千景~女優というプリズム』(2009 青弓社), 『渋谷実~巨匠にして異端』(2020 水声社)

報告 **第39回定例総会/懇親会&第14回**  
**「午後のポエジア」豊平館 2025/10/13**

10月13日(月) 午後に2025年度の活動を締めくくる定例総会、夜には懇親会と朗読会「午後のポエジア」が催されました。懇親会・午後のポエジアは会員/一般合計35人(うちポーランド人家族16人)が参加する盛会でした。総会議事録は8~10頁をご覧ください。(事務局)



午後のポエジア 2025 \*

菅原未栄氏自作「追悼 新川和江さん」、「私を束ねないで」をベースに新川と(菅原氏の旧姓)本川で挟んだとのことでした。



池田光良氏は解説で、シンボルスカは詩集『瞬間 Chwila』中の同名作品で地質学用語を使用し「卓状地」といわれる平野部やカルパチア「造山帯」という隆起部を挙げ、これをポーランドの歴史と絡めていると指摘し、日本語で作品を朗読。次いでシャレック・レナタ氏が同作品をポーランド語で朗読された。



新入会の風野中氏が朗読したのは更科源蔵作品の「国境」。大地は繋がっているのにどうしてここに、手を出させないよう、行ってはいけないような「国境」があるのか、両方から近寄ることを拒絶し、父か母のどちらか一方の血だけを選ばせようとするのか。



ムラサキ紫音氏は、花崎皋平作品『天と地と人と』からのスピリチュアル、超越すべき垂直という方向、呼吸することでの空気振動、風という無主の自由、さらに石牟礼道子の著作『苦海浄土わが水俣病』からの引用で想像力を動員して山や草という自然の大きさ、そうした哲学の言葉を選び出す。



小笠原正明氏は、宮沢賢治作品「永訣の朝」にでてくる“あめゆじゅとてちてけんじゃ”は一般的に“雨雪を取って来てちょうだい”と言う意味で捕らえられているが、正確な現地の方言とは言い難い—というお話をしていただいた。



ポーランドの詩人マリア・パヴリコフスカ=ヤスノジェフスカ(1891-1945)の没後80年、短めの詩作品に佐藤三姉妹が挑戦する。まずはレミアちゃん=10頁写真は作品「バラ」、トゲがその象徴でもあ

る薔薇を優しい声で、ポーランド語と日本語の両方の美の証人としてうたう。エステルちゃん「花となって」であるが、オレーヤージュ・シルヴィア氏に背もたれしつつ、一緒に花が咲くまで少し時間をかけて咲かせた。朗読予定のミアムちゃんは会場を逃げ回っていたので、代わって佐藤圭史氏が「あい」を朗読し完結させる。後日、ホラ去年はさあ〜といわれるかな(笑)。



そしてアントーニ・スウォニムスキ(1895-1976)の生誕130年とのことで作品「あわれ」が紹介された。日本語を村田讓、ポーランド語でジェプカ・ラファウの両氏が、1節ごと交互に読む試みである。日本語ではたった三文字の言葉であるが、国によつての感情で



あるとか異なるものとしての実感がある。その後村田讓は一枚の切符を取り出し(今は交通系カードですが、北海道の田舎路線では使えません)自作の「駅名標」を声にした。

ギターを抱えて数井バルバラ氏が登壇する。チェスワフ・ニューメン「ワルシャワの夢」の弾き語り。ポーランドでは割りとポピュラーな曲とのこと。二曲目のヴィルキ「エリ、ラマ、サバクタニ」はキリストが処刑される際に天に向かって述べた言葉で「わが神よ、なぜわたしをお見捨てになるのですか」との嘆きとされ、一人で叫ぶ者はもういないのだ、と。



ポエジアの最後は、ジェプカ氏によるポーランドクイズで締めくくりです。  
 =右=ポーランド家族の皆さん  
 (村田讓、運営委員、ブログ「空への軌跡・吟遊記」\*より)



## シヨパンへの愛 加藤 香緒理

ポーランドの伝統的文化を紹介する目的で、ポーランド国立クラクフ音楽院教授・ジェシュフ大学ピアノ科長ヤヌシュ・スコヴロン氏によるピアノリサイタル「ポーランドからの贈り物」が2025年2月に江別市と大空町女満別で催されました。この演奏会のコーディネーターとして私の地元である北海道ヘクラクフから同行しました。また10月にはワルシャワで第19回フレデリック・シヨパン国際ピアノ・コンクールが行われました。



スコヴロンピアノリサイタル

### 第19回シヨパン国際ピアノ・コンクール

シヨパンは日本で人気がとても高く、コンクール会場のワルシャワフィルハーモニアでは、普段聞くことがない日本語をこの期間だけはたくさん耳にします。前大会はパンデミックと重なりましたが、それでも会場にはたくさんの日本人がみえて、みなさんのシヨパンの作品への愛を感じました。



シヨパンコンクールは1927年に第1回が開催され、第2次世界大戦による中断の後、戦

桑原詩織さん(上) 西本裕也さん

後復興と共に再開されました。この第4回コンクール(1949年)の優勝者がスコヴロン氏の師、ハリーナ・チェルニー=ステファンスカ先生です。日本人はほぼ毎回入賞者が出ますが優勝者はまだいません。今年大会では中国人奏者のレベルの高さが非常に印象的でした。16歳のリュウ・ティエンヤオさんもその一人で、日本から出場された桑原詩織さんと並んで4位に入賞しました。彼女についてはコンクール前にスコヴロン氏から「素晴らしい中国人学生のレッスンをした。ワルシャワでの優勝を待っていると伝えた」と聞いていました。



リュウ・ティエンヤオさんとスコヴロン氏  
2025

コンクール開催中にごく注目され始めて、技術的に素晴らしいだけでなく、

音楽的にもすでに感覚的に理解して自由自在かつ自然に演奏できることに驚きました。

このコンクールは奏者がピアノを選ぶことができますが、スタインウェイ、ファツィオリなど世界の名器が並ぶ中、今大会では日本メーカーの KAWAI (SK)を選んだ奏者が多かったのも特徴的でした。

コンクールは全世界からインターネットで LIVE演奏が聴けるようになりましたが、ワルシャワの会場で生の演奏を聞くと、座る場所によって音の聞こえ方がこうも違うものかと思うほどに異なります。実際に私は数回会場に足を運びましたが、審査員も席替えをしながら聞いていました。

今年から採点方法が変わり、予想外の結果に審査員もびっくりした表情でした。このコンクール独特の気迫と緊張感、歴史が生まれる瞬間は特別な時間だと感じます。

シヨパン音楽の魅力ゆえにこのコンクールの文化価値がどれほど大きいのか、日本の皆さんにもお伝えしたいと思います。

### ヤヌシュ・スコヴロンピアノリサイタル

シヨパンコンクールの優勝者の下で研鑽されたスコヴロン氏のピアノリサイタルは、入場無料であったという間に整理券が無くなり、普段クラシック音楽を聞かない方も含めて多くの方にご来場いただきました。聴衆の方々からのメッセージに「音がいいとか、技術がすごいとかを超えて、我々日本人がクラシックと呼ぶ音楽が、ヨーロッパの人たちの血であり肉であることを感じた」というお言葉をいただき、その文化的価値は伝わったのではないかと感じました。

文化は人の生活を豊かにするかけがえの無いものであり、今回、私がポーランドで学んだ心の深いところで感じるお金で買えない豊かさの価値を、日本に伝えたいと思い企画させていただきました。ぜひまた、今年も日本に行きたいと思っています！暖かくご後援いただきました北海道ポーランド文化協会のみなさま、ありがとうございました。

(かとう・かおり、ピアニスト、クラクフ在住、江別市出身)

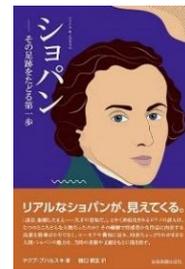


新刊  
紹介

## 『ショパン—その足跡をたどる第一歩』

ヤクブ・プハルスキ (著) 関口時正 (訳)

全音楽譜出版社 2025.4



本書は「リトル・モノグラフ」と銘打ったショパンの伝記である。時系列順に並んだ細かいエピソードが彼を取り巻く人間関係や当時の世界情勢などと絡めて描かれ、作曲家ショパンの人物像が生身の人間として蘇ってくる。

ショパンは祖国ポーランドを後にしてウィーンに向かったが、当時のワルツ一辺倒に染まったウィーンでは受け入れられず、苦渋を味わった。十一月蜂起の報に、帰国して自分も参加するか思い悩む。家族に説得されウィーンに残ったショパンは、演奏会のチャンスを探求めてサロンに出入りし社交生活に励んだが、本心は「サロンでは涼しい顔を装ってはいるが、家に戻ればピアノに向かってあたりちらしている」という極端な激情に揺さぶられていた。

その後に向かったパリでは、一転して一流サロンに出入りし上流階級への仲間入りを果たし、ポーランド亡命者として成功する。ショパンはサロンにおいて、リストやメンデルスゾーン、カルクブレンナーなどと交流し、職業音楽家として自立していく。

晩年、ショパンはジョルジュ・サンドと共に夏はノアンで過ごすようになるが、もともと病弱だった上、進行していた病が確実に彼を蝕む。本書では、臨終の様子を、臨場感あふれる形で描くことに成功しており、読者に彼の人間性を感じさせる。

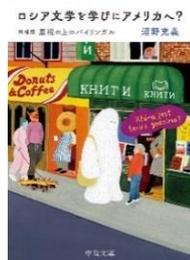
本書の特徴として、ただの伝記で終わらず、ショパンがピアノ音楽をどのように別次元に引き上げたのかということも詳述されている。例えば、ノクターンにおいて、その始祖であるジョン・フィールド(1782-1837)の作品にショパンがどのようなアイデアを加えたのか、また、練習曲というジャンルに与えた表現や技術的な書法が説明されている。

ショパンは練習曲やノクターンといった従来のジャンルだけでなく、バラードなど新しい音楽様式の作品も作曲したが、本書ではなぜ彼が新たな形式を必要としたのか深掘りしていて大変興味深い。

著者はショパンのバラードについて、ミツキューヴィチの詩作品との関連を否定し、バラード以前にショパンが作曲していた優雅な作品とは対照的に、より深みがあり、ロマン主義に源泉を辿ることができるとしている。さらに、ショパンはロマン主義をより広い意味で捉え、「靈感、幻想、出来事の目まぐるしい変化に従う自在な語り」を音楽のみで表現するために新たな形式を必要としていた。それはソナタ形式のような既成の型ではなく、語りに必要な分だけ自由に展開できる形式であった、と主張している。

作曲家としての活動を軸に、ショパンの私的なエピソードが散りばめられているのも本書の特色である。彼を支え続けたフォンタナとの微笑ましいやり取りや、婚約直前だったヴォジンスカとのエピソード、サンドと破局する原因の一つとなったサンドの娘、ソランジュについて書かれた手紙などから、ショパンという人間の多様性が浮かび上がってくる。

巻末には最新のショパンの研究史が掲載されており、ショパンについてより深く知りたい方には大変参考になるだろう。演奏家はもちろん、彼の音楽の愛好家にとっても、その作品の聞き方の幅を広げてくれる一冊である。(徳田貴子、ピアニスト、会員)



## 『ロシア文学を学びにアメリカへ？』

増補版 屋根の上のバイリンガル』

沼野 充義 (著)

中公文庫 2025.1, 白水社 1996.3, 筑摩書房 1988.4

大阪のJR鶴橋駅の商店街にある『カナリヤ』というカフェは、今も変わらず人気です。ここのチョコレートパフェは大きくてとても美味しいと、大学のクラスの女友だちが話していました。甘党だった私は「ぜひ!」と思い、友人たちと食べに行くことにしました。1990年代のことで、「食ベログ」などによるインターネットからの情報などはありません。カフェに向かう電車内で、パフェはそれなりに大きくて、カフェのある鶴橋の

商店街はオシャレなのだろうとイメージしていました。

鶴橋に到着後、イメージは覆されました。まず、『カナリヤ』のパフェは60程ぐらいいあって、大きいのではなく巨大でした。次に、鶴橋駅の商店街は活気のあるコリアンタウンでした。商店街のアーケード内では定番のキムチやカクテキなどが量り売りされていて、色とりどりのチョコリがハンガーにかかっている、そして路地裏にはハングルで表示された焼き肉屋さんが並んでいました。大阪の中に

外国人コミュニティがあることを初めて知り、興奮してエリア内を歩き回ったのです。

これがきっかけで、私は外国人コミュニティに関心を持つようになったのです。外国人コミュニティの基となるオリジナルの文化はどのようなものなのか。そのコミュニティはなぜ他国にできたのか。そして、そのコミュニティとオリジナルの文化はどう違うのか—そんなことを知りたくなりました。その翌年、大学2年生のときから、私はバックパッカーとなって海外をさまようのですが、行く先々で外国人コミュニティを探します。インド・コルカタ(当時はカルカッタ)のチャイナタウン、フィジー・スバにあるリトルインディアなどを訪れました。当時の私はコミュニティを探して到着することに精一杯で、大して学んでいなかったと思います。しかし、訪問を重ね地元の方々からの教えや書籍やインターネットで調べているうちに、私なりの探求学習が確立していったのです。

本書に惹かれた理由は、私の海外在住の始まりが沼野先生と似ている気がしたから、そして先生の探求心に大いに共感できるからです。

沼野先生は博士課程でロシア語・ロシア文学を専攻されていて、総仕上げに向けてソ連で学ぶ必要があると考えます。しかし、ソ連との交流が困難なこと、そして政治的な理由から研究テーマが限ら

れることから、アメリカで研究することを選択しました。アメリカにはソ連から亡命した学者や作家が多いからです。また、スラヴ・東欧諸国からの亡命者・移民がいることも好材料と思われたそうです。

私も英語を身に付けるためアメリカ留学を考えたのですが、費用が高いため、当時は廉価で英語を学べる準英語圏のマレーシアで働きながら学ぶことにしました。東南アジア諸国へのアクセスが良いことも選んだ理由のひとつでした。私は元々地歴科の教員で、ヒンズー教やイスラム教や仏教が融合する東南アジア文化に強い関心があります。

「アメリカの中のポーランド」「ワルシャワからシカゴへ」「英語は話せなくてもいい」の連続する3章は、特に素晴らしいです。ポーランド人街を確認するために、留学先のボストンからシカゴに向かう様子や、ポーランド人街を調査する様子などは、読んでいてワクワクします。シカゴに世界最大のポーランド人街があるとは知りませんでした! 興奮して、すぐにネットで確認しました。ぜひ訪れて、沼野先生のお考えや視点を参考にして、自分はどうに捉えられるかを確認したいです。

このように思っていたら、幸運にも、この2月にボストンへの出張があって、しかもシカゴ経由です。シカゴにあるポーランド人街に行き、ワルシャワとの違いを確認したいと思います。(齊藤賢人、会員)

## 『Домой—戦後 80 年・語り部 100 歳シベリア抑留者たちの声 ダモイの喜びと鎮魂の叫び—ろうそくの炎が消えるように亡くなった仲間へ』 シベリア抑留体験を語る会札幌\* (編集/出版) 2025.10

大東亜戦争から 80 年、その 10 年前から抑留体験者の声を聴こうとして戦争の愚かしさを伝えてきたこの会の活動に驚かされた。戦後の間もない時には北方、南方を問わず捕虜としての抑留談はよく聞かれたのだが、体験者が高齢のため少なくなりその話への熱も冷めたころから、講演会を全国で開き資料を道内の高校、図書館へ送るなど、見事なものを感じる。

私も3年前から毎年8月の「シベリア抑留北海道慰霊祭」のお手伝いをするようになったが、改めてこの本のおかげで生々しい体験者の声に教えられることが多く、この活動にさらに不戦、平和を求める気持ちが強くなった。ありがたいことである。と同時にこの本の完成には大変な努力があっただろうと思う。本の内容は9名の**体験者の講演、会員の声、抑留の資料**である。後世のために貴重なものだ。

シベリア・モンゴルの抑留は酷寒・飢餓・重労働がよく知られている。しかし2千か所の収容所の在り様はそれぞれ違って、各人2年から4年半の体験談はより詳しく知らされる。ただ一様に語られるのは、この理不尽な運命を呪い、一日も早い帰

国を望み、戦争はしてはならぬものだと語っていることだ。現在はほとんどお亡くなりになっておられるが、まだお元気にシベリアに残されている遺骨の収集に国に熱心に働きかけている方もおられる。

この9名の語り部の中に、5年前まで活動していた「北海道自分史友の会」の会員さん2名を見つけた。私も会員だったので平成29年の総会の写真を見ると、そのお二人と共に撮ったものがある。そのころ、現在のように抑留に関心があればどんなに良かったかと思う。色々な話が聞けたことだろう。友の会で毎年発行された作品集を今読み返して、この記念誌とはまた別の話が出ていて、4年間の抑留の日々では語りつくせないことが多々あったのだら



\* <https://www.facebook.com/profile.php?id=100064714747555>

うと思わされた。

収容所の環境、雰囲気も様々で、過酷なところと、まるで天国のようなところ、「こうした穏やかな環境が実現できたのは、ひとえに、その収容所のトップである大隊長の人間味にかかっていたと思います」という言葉は、組織を束ねる者の参考になる言葉である。

「体験を語る会」の会員さんの中にはロシアの方

もいて「この機関誌がかけがいのない平和のための資源となることを願っている」と寄せている。今もロシアとウクライナで同じことが繰り返されているのだと思うと胸が痛む。隣国のポーランドの方々もどんなに恐ろしさを感じているだろうか。ただ反戦、平和を唱えていても戦いの続く厳しい現実があることを忘れてはいけないと思う。(三田剛己、会員)

## 初めてのポーランド～文化と歴史に触れる旅 多原 良子

2025年5月上旬、ポーランド・ブロツワフで開催された文化交流イベント「さくら」に参加する機会を得た。この訪問は、2022年に札幌で「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』」を企画・プロデュースした元駐日ポーランド大使ヤドヴィガ・ロドヴィッチ氏からの招待によって実現し、かねて抱いていた、いつかポーランドを訪れたいという念願が叶う初めての旅となった。

ブロツワフで講演



### ピウスツキのポーランドへ

私にとってポーランドは、ブロニスワフ・ピウスツキの存在ゆえに特別である。彼はロシア皇帝暗殺未遂事件に連座して逮捕され、樺太へ流刑となった人物だが、強制労働後は模範囚として扱われ、サハリンで民族研究や子どもの教育に従事した。とりわけ、アイヌ語や歌を蝋管蓄音機で記録した功績は、今日に至るまで貴重な文化遺産とされている。また樺太アイヌの女性と結婚したことで知られ、その人生はアイヌ民族との深い関わりなしには語れない。加えて、歴史の中で大国の思惑に翻弄されてきたポーランドの歩みはアイヌ民族の経験と重なる面が多く、私自身の関心と共感を強めてきた。

以前、ポズナン大学に所蔵されていたピウスツキの蝋管を北海道大学へ移送し、日本の最新技術で再生を試みるプロジェクトのために来日されたマイエヴィチ氏と居酒屋で何度も議論を交わしたことがある。また、フランスを訪れた際、娘の配偶者の叔母が眠る墓地に偶然ピウスツキの墓碑を見つけ、深い縁を感じて言葉を失ったこともあった。

流刑後にポーランドへ戻った彼は不遇の晩年を送り、各地を転々とした末にパリで自死したと伝えられる。誠実で温かな人柄の彼が、なぜ苛烈な運命に巻き込まれたのか。その背景にあったであろう人道主義的精神と反体制的思潮への共鳴について、思いを巡らさずにはいられなかった。

### ブロツワフで

ワルシャワからブロツワフまで列車で約三時間。窓外には緑と菜の花の黄色が広がり、心に描いていたポーランドそのものの田園風景が現れた。運河

に囲まれたブロツワフの街には東欧独特の文化と歴史が息づき、路面電車が静かに行き交っていた。

イベント会場は旧教会を改装した建築博物館で、私は「アイヌ女性の複合差別からの脱却」を題目に講演した。アイヌがたどってきた歴史の苦難や、現在も続く女性の課題について語ると、参加者から「差別と闘い続ける勇氣ある行動に深い敬意を表する」「連帯を惜しまない」といった言葉を頂いた。日本に先住民族がいることへの驚きが主な反応かと予想していたが、長い独立闘争を経験したポーランドの歴史が、他民族の苦難への共感を育て



『祖霊祭』の朗読者たちと\*



ブロツワフの植物園で

ているのだと気づかされ、大きな感銘を受けた。

続いて、ヤドヴィガ氏、元舞台女優、古楽器奏者、私の四名で各民族の言語と音楽を織り交ぜた「シンヌラッパ・クネニサツ(夜明け前の『祖霊祭』)」を上演した。共演者の朗読の力強さと深い表現力に、演じる私自身も引き込まれた。

その後ワルシャワで二日過ごし、ヤドヴィガ氏が副館長を務めるユゼフ・ピウスツキ博物館を案内して頂いた。ポーランド独立を導き初代国家元首となったユゼフの生涯を壮大に描く展示は圧巻だった。

今回の訪問は、文化的・歴史的縁が幾重にも重なり合う、私の人生において特筆すべき体験となった。関わってくださったすべての方々へ心より感謝を申し上げたい。(たはら・りょうこ、メノコモシモシ代表)

## 外務省主催 「北方領土を語る会」 in ポーランド

千島歯舞諸島居住者連盟 理事長 松本 侑三

2024年11月12-14日の三日間ポーランドを訪れました。訪問の趣旨は、日本・ロシア間に存在する領土問題への理解と「北方領土返還要求運動」への国際的な協力をお願いすることでした。



日程は以下のとおりです。

- ・12日(火)12:30 ワルシャワ市・在ポーランド日本大使館(大使公邸)にてブリーフ/13:00 ポーランド日本友好議員連盟との意見交換
- ・13日(水)11:00 ビャウイストク市・シベリア記憶博物館 Muzeum Pamięci Sybiru にて館長と意見交換/12:30~13:00 シベリア抑留経験者、家族との意見交換/14:30~16:30 博物館職員による解説、見学
- ・14日(木)9:30~11:30 ワルシャワ市・国家記憶院 Instytut Pamięci Narodowej との意見交換/13:30~15:00 東邦研究所との意見交換

## 私たちの訴え

日本が失った北方領土(歯舞諸島、色丹島、国後島、択捉島)は自然豊かで、資源の豊富な島々でした。

## 1. 不法占拠の経緯

1945年8月15日、日本がポツダム宣言の無条件受諾を発表し終戦を迎え、日本軍は招集解除・武装解除をします。

8月28日、旧ソ連軍が突然、択捉島留別村に上陸し、9月5日までに四島を不法に占拠しました。択捉島(天寧)には日本帝国陸軍89師団(約1,500人)、海軍51海防隊(約350人)、海軍航空隊(滑走路2本)が存在しましたが、戦闘することなく武装解除・再招集(滑走路に集合)に応じます。

9月29日から天寧(私の生まれた集落)、年萌を中心に家宅搜索(日本兵がいないかという名目)が始まります。四日間にわたる搜索は略奪そのものでしたが、暴力的な事件は見られませんでした。ただ、集落による違いはありました。

9月7日から択捉島太平洋側単冠湾天寧を中心に旧ソ連の民間人が入村、ここから奇妙な共同生活が始まります。略奪の後に入ってきたソ連の人たちを見て私の父親は「戦争に負けたけど民度では勝った」と言っておりました。

天寧郵便局は旧ソ連共産党機関紙『プラウダ』の発行所、向かいの駅通は共産党政治局支局になりました。自分たちが送り込んだ民間人を啓蒙しなければならなかったのでしょう。

島民には写真付きの身分証明書が発行され、ノルマが与えられ、ルーブルで賃金、パン、バターなどの配給があり、労役につきます。

二年半に及ぶ共同生活の後、樺太(サハリン)の真岡の収容所に送られ、悲惨な生活の後に函館に帰還します。

(不法占拠により)私たちが失ったものは、動産、不動産、自然、水産業を中心にした産業、資源、そしてそこで生活する権利を含めあらゆるものです。

## 2. 訴えていること—北方四島の返還

- ・中断しているロシアとの平和条約交渉の早期再開
- ・1964年に人道的見地から旧ソ連と合意して始まった北方墓参の早期再開
- ・1990年から始まったが合意が停止されているビザなし交流・自由訪問の再開
- ・国内外への啓発活動を通して返還後の島の自然、資源を生かしたあるべき島の姿の展望

## 3. ポーランド訪問で得たこと

- ・シベリア記憶博物館では、「記憶」を「記録」しあらゆる手法を駆使した、汽車から始まりカチンの森で終わる展示の流れは一体感があり、表現の仕方は学ぶべきことが大きかった。
- ・東邦研究所において、北方領土問題を研究する班を作る提案があった。
- ・全体を通して、領土は主権の問題であることを、四面海に囲まれた私たちに強く意識させられた。

## 4. 感想

1920年代、日本のシベリア出兵時に、日赤を中心に、シベリアに残されたポーランドの子供たちを日本に連れ帰り厚遇し、健康な体に戻してポーランドに帰した物語『桜の咲く国日本』で過ごしたシベリア孤児』Sylwia Szarejko, *Polskie dzieci w Kraju Kwitnącej Wiśni, Muzeum Pamięci Sybiru, Białystok 2023, ss. 104\**というポーランド語と日本語併記の冊子を頂きました。孤児たちのその後の人生まで描かれ、そこから教育の在り方にも力を入れています。国と国、人と人の繋がり、生命の尊厳を強く感じました。

学生時代に映画『地下水道』『灰とダイヤモンド』を見ましたが、今回の訪問で強く国を愛することの大切さを学びました。(まつもと・ゆうぞう)



\* <https://sybir.bialystok.pl/polsko-japonski-dzien-w-muzeum-pamieci-sybiru/>

## 第 39 回定例総会議事録

(議長 小笠原正明)

2025 年 10 月 13 日 (月・祝) 札幌市・豊平館において第 39 回定例総会を開催し (出席者 13 人・委任状 44 通 [会員数 88 の 1/3 超 = 30])、以下の議案について審議し、各議案とも過半数の賛成を得て議決されました。

[第 1 号議案]2025 年度(2024.9-2025.8)活動報告について(ラファウ・ジェプカ)

1.《第 38 回定例総会》と懇親会、豊平館 2024.10.12 (土) 1F 下の広間 15:30～総会(出席者 11 人・委任状 42 通[会員数 90 人の 1/3 超=31 人])、2F 広間 17:30～懇親会(参加者 38 人[うち会員 18 人、ポーランド人家族 11 人、一般 9 人])

## 2.例会等

(1)《第 114 回例会》ポーランド名作映画ビデオ鑑賞 & 交流会『イーダ Ida』札幌エルプラザ 2025.3.19(水) 参加者 34 人(うち会員 9 人)アンケート 12 枚、質問紙 1 枚

(2)《第 115 回例会》ポーランド名作映画ビデオ鑑賞 & 交流会『水の中のナイフ』札幌エルプラザ 2025.5.8(木)参加者 26 人(うち会員 11 人)アンケート 11 枚

(3)《第 116 回例会》講演&上映会「ポーランドと日本: 新渡戸稲造とポーランドの偉人たち～ピウスツキ家の人々(ユゼフ&アレクサンドラ夫妻とブロニスワフ)、パデレフスキ、キュリー夫人ほか」講演①「ピウスツキ兄弟: インスピレーションが未来を形作る」ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ(スレヴエク市のユゼフ・ピウスツキ博物館副館長、元駐日ポーランド大使)講演②「19～20 世紀の転換期におけるポーランド人女性の独立運動での活動」マウゴジャータ・バサイ(同館展示普及部長)&映画『ピウスツキ・ブロニスワフ～流刑囚、民族学者、英雄』札幌エルプラザ 2025.6.10(火)参加者 45 人(うち会員 14 人)アンケート 24 枚

3.会誌 POLE no.114(2025.1.5)no.115(2025.4.15)発行

4.運営委員会①2024.9.30②2025.3.24③2025.7.14

## 5.後援事業等

(1)〈後援〉♫川染雅嗣ピアノリサイタル in アルテピアッツァ美唄 Vol.V～石のそばに佇む、2024.10.5

(2)〈後援〉♫徳田貴子ピアノリサイタル～グラジナ・バツェヴィチの系譜、札幌・ふきのとうホール 2024.10.25 / 恵庭・夢創館 10.27

(3)さっぽろ雪まつり第 49 回国際雪像コンクール(大通 11 丁目 国際広場 2025.2.2-2.7)に参加のポーランド・ヴロツワフ美術大学 ASP Wrocław チームを応援

(4)〈後援〉ヤヌシュ・スコヴロンピアノリサイタル、江別・えぼあホール 2025.2.21

(5)〈後援〉シヨパン名曲コンサート part 7～北海道教育大学岩見沢校水田研究室卒業生の有志によるコンサート、ザ・ルーテルホール 2025.2.24

(6)ブロニスワフ・ピウスツキ記念行事(107 回忌)ウポ

ポイ 2025.5.17、観世流能楽師 津村禮次郎氏らによる手向けの演奏と舞(献花、参加:安藤厚、井上絃一、尾形芳秀)

6.会員動向(2025 年度)入会 6 人:引田秋生、坂尻昌平、樋口みな子、住谷秀保、高松菊乃、風野中逝去:佐々木保子

退会 7 人:大塚広介、片倉昭良、小林美保、高岡健次郎、丸山博、水上淳也、吉田邦子(敬称略)

会員数 90 人(うち休会中 2 人)(2025.10.13 現在)

[第 2 号議案]2025 年度収支決算報告および会計監査報告について(園部真幸・稲川和幸・嵩文彦)別紙参照

[第 3 号議案]2026 年度(2025.9-2026.8)活動計画について(ラファウ・ジェプカ)

1.《第 39 回定例総会》&懇親会兼「午後のポエジア」豊平館 2025.10.13(月・祝)総会 1F 下の広間 15:30～、懇親会兼「午後のポエジア」2F 広間 17:30～

## 2.例会等

(1)午後のポエジア

(2)名作映画ビデオ鑑賞会

(3)講演会等

(4)その他:後援・協力依頼には随時対応

3.会誌 POLE no.116(2025.9.1)no.117(2026.1)no.118(2026.5)

4.運営委員会:3 回程度

5.オンライン広報(HP, Facebook 等)の充実

[第 4 号議案]2026 年度予算(案)について(園部真幸)別紙参照

[第 5 号議案]2026 年度役員等(案)について(安藤厚)(会則第 6 条に基づく役員)

会 長:安藤厚

副会長:塚本智宏

運営委員:安藤むつみ、池田光良、小笠原正明、北浦由花里、熊谷敬子、坂田朋優、霜田英麿、園部真幸、中島洋、アグニェシュカ・ポヒワ、村田譲

事務局長:ラファウ・ジェプカ

監査委員:稲川和幸、嵩文彦

(会則第 15 条に基づく事務局、委員会等)

事務局:(事務局長)ラファウ・ジェプカ、(副事務局長・会計)園部真幸、(催物)安藤むつみ、池田光良、熊谷敬子

編集委員会:安藤厚、池田光良、熊谷敬子、越野誠

広報委員会:安藤厚

(会則第 16 条に基づく東京事務所)

(所長)霜田英麿、(副所長)熊倉ハリーナ

以上

2025年度 収支決算書（自2024年9月1日～至2025年8月31日）

○一般会計

【収入の部】

(単位：円)

	決算	予算	増減	備考
会費	155,000	129,500	25,500	納入率3千×87人×59.3%
寄付金	65,500	50,000	15,500	
雑収入	345	4	341	銀行利子
小計	220,845	179,504	41,341	
前年度繰越金	556,145	556,145	0	
合計	776,990	735,649	41,341	

【支出の部】

(単位：円)

	決算	予算	増減	備考
事業費	122,397	100,000	22,397	38総会67.5千、114回会17.8千、115回例会14千、116回例会1.5千、39総会会場費等21.3千外
連絡費	57,841	100,000	△ 42,159	POLE113-115発送外
編集費	55,762	70,000	△ 14,238	新刊紹介本9.9千、POLE114号19.6千、115号19.6千、チラシ印刷6.5外
会合費	20,143	21,000	△ 857	運営委員会3回開催に係る賄い費、交通費
事務費	35,679	49,000	△ 13,321	HP経費8千、用紙、コピー、プリンターインク外
雑費	11,165	22,000	△ 10,835	献花代
予備費		373,649	△ 373,649	
小計	302,987	735,649	△ 432,662	
次年度繰越金	474,003		474,003	
合計	776,990	735,649	41,341	

○特別会計

【演奏部会基金】

(単位：円)

	収入の部	支出の部	備考
前期繰越金	267,975		
利息	167		
合計	268,142	0	

会計の監査にあたり、関係書類及び通帳を照合した結果、適正に処理されていることを確認しましたのでここに報告します。

2025年9月21日

監査委員

高文彦

2025年9月21日

監査委員

福岡知幸



=写真左より= 小笠原正明 総会議長、  
ジェブカ・ラファウ 事務局長、園部真幸 会計担当

## 2026年度 収支予算案 (自2025年9月1日～至2026年8月31日)

(単位:円)

【収入の部】	予 算	前年度決算	増 減	24年度決算	備 考
会費	217,000	155,000	62,000	367,500	3千×85人×85%
寄付金	55,000	65,500	△ 10,500	47,000	24-25年度実績平均程度
雑収入	300	345	△ 45	4	貯金利子 (25年度実績程度)
小 計	272,300	220,845	51,455	414,504	
前年度繰越金	474,003	556,145	△ 82,142	445,896	
合 計	746,303	776,990	△ 30,687	860,400	
【支出の部】					
事業費	100,000	122,397	△ 22,397	51,322	39総会4万、例会4回×1.5万
連絡費	105,000	57,841	47,159	96,373	ポーレ発送等(2.5万×3号)、その他郵送3万
編集費	80,000	55,762	24,238	79,337	ポーレ(2万×3号)、チラシ・配布資料等2万
会合費	30,000	20,143	9,857	20,889	運営委員会 (10千×3回)
事務費	35,000	35,679	△ 679	34,833	HP経費、用紙、コピー外
雑費	15,000	11,165	3,835	29,301	花代等
予備費	381,303		381,303	0	
小 計	746,303	302,987	443,316	312,055	
次年度繰越金	0	474,003	△ 474,003	556,145	
合 計	746,303	776,990	△ 30,687	868,200	

## ○特別会計

【演奏部会基金】前年度繰越金 268,142

## 豊平館に響くポーランドの詩情～「午後のポエジア」に参加して 樋口 みな子

秋深まる 10月13日、定例総会の後に開かれた朗読と音楽の会「午後のポエジア」。会場は中島公園の豊平館。歴史ある空間にポーランドの詩と旋律が静かに、そして力強く響きました。私は今回が二度目の参加です。昨年のポエジアがとても楽しく、北海道ポーランド文化協会に入会するきっかけとなりました。

ポーランド文化を伝える本、映画、音楽など、多彩な分野に関心を持つ会員が集う場は、実はそれほど多くありません。新人紹介でも書きましたが、ポーランドを訪れた際、音楽が日常に溶け込んでいることに驚き、深く感動しました。

これまで多くの市民運動に関わってきましたが、ポーランド文化の紹介と普及を目的とする本協会の存在は、とても意義深いものだと感じています。ポーランドの映画や音楽、文学作品に触れられる機会があることも、私にとって大きな喜びです。

入会後に読んだ会報『ポーレ』第114号で、安藤厚会長がポーランドから「ベネ・メリト」名誉勲章を受章されたことを知りました。会員の皆さんは



すでにご存知だったかもしれませんが、私は入会前のことで、安藤先生ご自身もその榮譽について語ることはありませんでし

た。その謙虚なお姿に触れ、「素敵な会」に入会できたことへの感謝の気持ちが深まりました。

懇親会は熊谷敬子さんの司会で、音楽鑑賞から始まりました。声楽の高橋加奈子さんによるメゾソプラノ、ピアノは坂田朋優さん。石川啄木作詞の「初恋」からショパンの「願い」まで5曲の演奏に、久しぶりの音楽会で心が洗われるような思いがしました。



プログラムを通して、2025年が詩人マリア・パヴリコフスカ=ヤスノジェフスカ没後80年、アントーニ・スウォニムスキ生誕130年の記念年とされていることを初めて知りました。佐藤レミリアさん、エステラさん、ミリアムさんによる朗読は、いずれも印象深く、特にレミリアさんが朗読した「バラ」と頭のバラの冠がとても愛らしく、心に残りました。



(ひぐち・みなこ、会員、『銀河通信』編集・発行人)

## 人の心で築かれた橋〜ルブリンと当別 オレーヤージュ・シルヴィア



どのような国際協力が最も永続的なのでしょうか。それは紙にインクで記されたものでも、経済的な指標で測られるものでもありません。真に深い絆とは、人々の運命を結びつけ、真理を探求する心と相互理解を求める心です。そのような友情と学問の錬金術が、今まさにポーランドと日本、ルブリンと当別の間で進んでいます。

この友情の礎にあるのは情熱です。すなわち、発見への欲求、知識を分かち合う喜び、そして最も貴重なもの、それは若い世代の未来に投資する気持ちです。この心臓となるのが、ルブリン国立医科大学と北海道医療大学という二つの大学です。

2025年秋、ポーランドから二人の歯科医師を迎える栄誉に預かりました。10月には小児歯科学の専門家であるマリア・ミェルニク=ブワシュチャク教授が来日されました。その献身と情熱は私たちに強いインスピレーションを与えました。

11月には、歯学部長のレナタ・ハウス教授=写真中央=が来日されました。教授の講演「高齢者における味覚と栄養障害、およびその口腔粘膜への影響」は単なる学術的な発表ではなく、真の学問の中心には常に「人間」があり、高齢者の尊厳と健康を守ることが私たちの倫理的使命であることを示すものでした。

お二人の先生は、新たな構想と日本の同僚との思

い出とともに、ポーランドへ帰られました。北海道の雄大な自然、当別の静けさ、札幌の活気あふれる街並み、そして和食文化の豊かさが、学問への情熱を彩る忘れたくない背景となり、知的成長は文化と美の調和の中で最もよく花開くことを証明しました。

この物語はすでに次の章に移行しています。間もなくルブリンは北海道からの学生たちを迎え入れ、ポーランドの叡智の宝庫から学ぶ機会を提供するでしょう。全学部を対象とする私たちの協定は、未来への約束でもあります。歯学と薬学での成果に続き、心理学、精神医学、健康科学、そして生命倫理の分野での新たな協力へと希望の目を向けています。

来年、ルブリンは北海道の薬学部生たちを迎えます。彼ら若き学生たちは、この美しい友情の大使として旅立ちます。結局、この世界をより良く変えていくのは人々、その情熱、夢、そして出会いなのです。

(Sylwia Olejarz, Ph.D., 北海道医療大学)

## 小林文乃さん『カティンの森のヤニナ』でポーランド「最優秀歴史書賞」受賞！

2023年秋の例会でお話いただいた小林文乃さんが、著書『カティンの森のヤニナ〜独ソ戦の間に消えた女性飛行士』(2023)により、ポーランド外務省「最優秀歴史書賞」2025外国語出版部門で特別賞を受賞されました。日本人作家としては初めての快挙です。\*

〈受賞の言葉〉この度の受賞を、大変光栄に思います。日本の読者だけでなく、ポーランドやその他の国の方々にもこの本を知ってもらえるチャンスを得たことが、なにより嬉しいです。

本作を執筆中にウクライナ戦争が始まり、私自身、本の世界が突然リアルに感じられるようになりました。その感覚こそが、今回の受賞理由のすべてと言えるのではないのでしょうか。混迷の続くいまだからこそ、ひとりでも多くの方に届けたい一冊です。

〈授賞式を終えて〉12月10日、ワルシャワの外務省で授賞式に参加しました。賞の主催者であるラドスワフ・シコルスキ副首相兼外務大臣から賞状が手渡され=右写真=、次に審査委員の一人であるヤン・マレツキ氏から選考過程が紹介されました—第一次選考に上がったのは54作品、そこから最終選考で16作品に絞られ、最終的に受賞9作品が選ばれたそうです。私がこの場に立てる奇跡を、改めて噛み締めました。

驚いたのは、この本に対する現地での関心の高さです。記者会見を兼ねたレセプションでは、沢山の質問を受けました—ポーランド人もほとんど知らないヤニナ・レヴァンドフスカのことをどこで知ったのか、どうや

って資料を集めたのか、日本ではどう受け入れられているのか…

ポーランド外務省が作成した『傑出したポーランドの女性たち』2(2024.7)という本に、キュリー夫人らと並んでヤニナが入っていたのには感激しました。

受賞の影響はポーランドだけに留まりません。なんと、在ポーランド日本大使館からも講演のお話をいただいたのです。申込み期間が一週間と短く、誰も来てくれないのではないかと不安だったのですが、蓋を開けてみればほぼ満席。ポーランド人の登録者数の方がずっと多かったそうです。

講演では、取材の過程で撮った写真を紹介しながら、ヤニナとその家族の運命をお話しました。日本と明らかに違ったのは、カティンの森の写真が映し出された時です。会場が静まり返り、聴衆の息遣いが聞こえてくるほどでした。この事件を扱うことへの責任の重さを痛感させられる瞬間でした。

最後に、この旅で最も嬉しかったのは、念願だったポーランド語への翻訳の道が開けたことです。ポーランドの皆さんにも、少しでも早くこの本をお届けできるよう願っています。(小林文乃、ノンフィクション作家)



\* <http://hokkaido-poland.com/picture/KatynKobayashiYomiuri20251227.jpg>

## 坂田 朋優 さん「北の聲アート賞」を受賞！

坂田朋優さんが、民間の文化塾「サッポロ・アートラボ SALA」（柴橋伴夫 代表）が毎年、全道各地でさまざまなジャンルで芸術文化の種を蒔いているアーティスト、団体に贈る「北の聲アート賞」（2025年度 第11回、八木幸三 審査委員長）を受賞されました。おめでとうございます！

受賞者☆北の聲アート賞 池田緑(美術) ☆ビルダップ賞 坂田朋優(音楽=ピアノ) ☆アウラ賞 櫻井百子(建築) ☆ハルニレ賞 松井信子(演劇・朗読) ☆審査員特別賞 高橋秀明(文学) ☆書的美賞 大高蒼龍(書道)[敬称略] =贈呈式: 10月18日@豊平館, 写真提供 柴田望氏=



〈受賞の言葉〉今回このような素晴らしい賞をいただき、大変うれしく思っております。関係者の皆様、日頃から支えてくださっている皆様に深く御礼申し上げます。ポーランドで学び、北海道に戻ってから早いもので15年以上が過ぎました。北海道ポーランド文化協会でも、周年演奏会をはじめ、さまざまな機会に演奏させていただきました。ここ数年は、道内の音楽家の方々と知り合う機会も増え、長年音楽界を牽引されてきた先生との共演機会にも恵まれました。まだまだ学ぶべきことも多いですが、この賞を励みに、これからも真摯に作品と向きあい、より一層努力していきたいと思っております。  
(坂田朋優、北翔大学准教授、運営委員)

**ご寄付 (2025.8-12) 深謝!**

**年会費 (2025.9-26.8) 納入のお願い**

(1口千円)(7) 齊藤賢人、齊藤美佳 (2) 前田理絵、安藤厚、安藤むつみ、安藤瞬、小林浩子 (1.5) 住谷秀保 (1) 小池敏大 (敬称略)

今年度会費の納入をよろしくお願い申し上げます(一般3千円、学生1,5千円)。維持会費(1口千円:任意のご寄付)もよろしくお願ひ申し上げます。

※ご請求額のある方には個別の納入依頼(振替用紙同封)を同封しております

◆ゆうちょ銀行振替口座【記号】02740 5【番号】19735【加入者名】北海道ポーランド文化協会

(他行から送金の場合) 店番(279) 預金種目(当座) 店名(二七九[ニナナキユウ]店) 口座番号(0019735)

◇北洋銀行(本店営業部) 普通預金口座【店番号】028【口座番号】0605084【名義】ホッカイドウポーランドバンクカキョウカイ ※「北洋銀行アプリ」を利用すれば、北洋銀行口座間の送金手数料は無料

※遠方の方はご寄付(年1,500円)で会誌 POLE の定期読者になることもできます。事務局にお問合せください

### POLE117号目次

〈第118回例会〉ポーランド名作映画ビデオ鑑賞&交流会2026-1 愛に関する短いフィルム(池田光良)……	1
(報告)第39回定例総会/懇親会&第14回「午後のポエジア」(事務局、村田讓)……………	2
シヨパンへの愛(加藤香緒理)……………	3
〈新刊紹介〉シヨパン〜その足跡をたどる第一歩(徳田貴子) ロシア文学を学びにアメリカへ? 増補版 屋根の上のバイリンガル(齊藤賢人) Домой〜戦後80年・語り部100歳シベリア抑留者たちの声(三田剛己) 4-6	
初めてのポーランド〜文化と歴史に触れる旅(多原良子)……………	6
外務省主催「北方領土を語る会」in ポーランド(松本侑三)……………	7
第39回定例総会議事録・2025年度収支決算書・会計監査報告・2026年度収支予算案(小笠原正明、嵩文彦、稲川和幸、園部真幸)……………	8-10
豊平館に響くポーランドの詩情〜「午後のポエジア」に参加して(樋口みな子)……………	10
人の心で築かれた橋〜ヘルブリンと当別(シルヴィア・オレーヤージュ) 小林文乃さん『カティンの森のヤニナ』でポーランド「最優秀歴史書賞」受賞! 〈受賞の言葉〉(小林文乃)……………	11
坂田朋優さん「北の聲アート賞」を受賞! 〈受賞の言葉〉(坂田朋優)……………	12

 <p>発行 北海道ポーランド文化協会 〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方 TEL・FAX 011-556-8834, mail: hokkaidopolandca@gmail.com</p>	<p>ポーレ編集委員会</p>
	<p>東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付 TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058</p>

POLE no.117 (January 2026)

Newsletter of the Hokkaido-Poland Cultural Association

Table of Contents

Announcement: video viewing on March 14, 2026: "A short film about love" by K. Kieślowski (M. Ikeda)	1
Report: 39 <sup>th</sup> Annual meeting and poetry reading "Afternoon Poesia" on October 13, 2025 (J. Murata)	2
Love for Chopin: Janusz Skowron piano recital in Hokkaido and the 19 <sup>th</sup> International Fryderyk Chopin piano competition in Warsaw (K. Kato)	3
Book Review: "Chopin" by Jakub Puchalski (T. Tokuda), "Traveling to America to study Russian literature? Expanded edition 'Bilingual on the roof'" by M. Numano (K. Saito), "Домой: 100-year-old storytellers, 80 years after the World War II: voices of Japanese prisoners of war in Siberia" (T. Mita)	4-6
My first trip to Poland: a journey to experience culture and history (R. Tahara)	6
"Discussion on the Northern territories" in Poland, hosted by the Ministry of Foreign Affairs of Japan (Y. Matsumoto)	7
Minutes of the 39 <sup>th</sup> annual meeting, Fiscal year 2025 financial statement, Audit report, Fiscal year 2026 budget proposal (M. Ogasawara, F. Dake, K. Inagawa, M. Sonobe)	8-10
Polish poetry resonating at the "Afternoon Poesia" (M. Higuchi)	10
A bridge built by people's hearts: Lublin and Tobetsu, Hokkaido (S. Olejarz), Kobayashi Ayano wined Poland's "Best History Book Award" for "Janina of Katyn Forest"! Speech and report (A. Kobayashi)	11
Sakata Tomomasa wined the "Voices of the North Art Award"! Speech (T. Sakata)	12